

下総牧羊場の系譜(2)

牧羊生徒と牧羊職員たち

誌名	農村研究
ISSN	03888533
著者名	友田,清彦
発行元	東京農業大学農業経済学会
巻/号	97号
巻号補足	
掲載ページ	p. 70-81
発行年月	2003年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター

Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



下総牧羊場の系譜（2）

—— 牧羊生徒と牧羊場職員たち ——

友 田 清 彦*

目 次

- I. はじめに
- II. 牧羊生徒
 - (1) 牧羊生徒の召集と教育内容
 - (2) 卒業後における牧羊生徒の動向
- III. 牧羊伝習生 ……………以上, 前号
- IV. 牧羊場職員 ……………以下, 本号
 - (1) 第1グループ〔農政官僚〕
 - (2) 第2グループ〔牧畜事業指導者〕
 - (3) 第3グループ〔民間事業家〕
 - 1) 新原敏三と耕牧舎
 - 2) 桂 弥一と豊浦農場
 - 3) 舟木 真と波東農社
- V. おわりに

IV. 牧羊場職員

前号の拙稿で述べたように、下総牧羊場は国家的プロジェクトの一環として創設され、それゆえに多数の内務省官吏が職員としてこの事業に係わった。表2-1は下総牧羊場創設以来、明治13年（1880）3月まで、すなわち岩山敬義場長時代に入場した職員を一覧表としてまとめたものである。これらの職員は、その後の動向によって、大きく3つのグループに区分することができる。第1は、内務省勸農局・農商務省農務局と、中央にあって一貫して勸農政策に与った農政官僚たちであり、例えば奥 青輔をはじめ、奏任官クラスの官僚や、判任官クラスの属官の多くもこのグループに属する。第2のグループは明治18年（1885）6月における下総種畜場の宮内省移管（のち明治21年下総御料牧場と改称）にともなって、農商務省から

宮内省に籍を移した官僚たちである。彼らは同年12月の宮内省御料局設置にともない、同局の配属となった。3代場長宮岡正吉や辻 正章などが、このグループに属する。第3のグループは官吏としての途を辿らず、宮内省にも残らなかった人々であり、退場事由が退職・帰郷となっている者はほとんどがこのグループに属する。第1・第2グループの多くが判任官クラスであったのに対して、第3グループでは雇が多数を占めている。

(1) 第1グループ〔農政官僚〕

第1グループは岩山敬義の農政官僚としての系譜を引き継ぐ人々である。その典型として奥 青輔について見てみよう。奥は弘化3年（1846）9月、岩山より7歳年下であるが、同郷の鹿児島藩に生まれ、戊辰戦争をへて、明治7年（1874）勸業寮十等出仕として官界に入り、同9年6月下総牧羊場に入場した。勸農局三等属、同御用掛をへて、明治14年（1881）農商務省設立にともない同省権少書記官、さらに少書記官に進み、明治17年7月14日権大書記官に昇った。明治18年（1885）2月20日、農商務省に水産局が設置されると初代の水産局長にあげられた。このころの農務局長が大書記官岩山敬義である。ところが水産局は、明治23年（1890）6月21日には廃止され、農務局に移管、水産課に縮小されてしまう（『農林水産省百年史』編纂委員会編、1982：253, 583, 586）。これについて下啓助は「局長の奥氏が健在であったなら同氏は関関もあり、敏腕でもあったので欧洲の視察を終へて帰朝されたら水産局は大拡張をなしたであつたらふ」（下、1932：9）との感想を漏らしている。すなわち、明治19年（1886）3月13日から翌20年6

* 東京農業大学国際食料情報学部

表 2-1 下総牧羊場職員名簿（明治9年6月から13年2月までの入場者）

氏 名	官 等	入場年月	退場年月	事由	備 考	大
岩山 敬義	権大書記官	M 9. 6	M 13. 3	帰京	初代場長	特
波多野 尹政	権少書記官	M 9. 6	M 18. 6	宮内	2代場長，岩山敬義碑発起人	特
門馬 崇経	一等属	M 9. 6	M 11. 1	死亡		
奥 青輔	一等属	M 9. 6	M 13. 1	帰京	その後勸農局御用掛，農商務省権少書記官，同省少書記官等，本文後述	特
蒔田 彰義	御用掛	M 9. 6	M 13. 1	退職		
長瀬 義幹	三等属	M 9. 6	M 12.12	退職	その後，農商務省権少書記官	特
宮岡 正吉	三等属	M 9. 6	M 18. 6	宮内	3代場長，宮内省御料局三等属，岩山敬義碑発起人，本文後述	特
川合 執銀	四等属	M 9. 6	M 14. 7	帰京	岩山敬義碑発起人	特
藤崎 忠貞	五等属	M 9. 6	M 14. 2	退職		
李田 登大	六等属	M 9. 6	M 13. 4	帰京	その後農商務省農務局六等属，五等属等	特
石澤 龍尾	六等属	M 9. 6	M 18. 6	宮内	その後宮内省御料局六等属，岩山敬義碑発起人	普
岡田 任一	七等属	M 9. 6	M 13. 4	帰京	その後勸農局七等属。	
平野 和親	八等属	M 9. 6	M 12. 3	帰京	その後勸農局七等属，農商務省農務局六等属等，岩山敬義碑発起人	普
中桐 常利	八等属	M 9. 6	M 12. 5	死亡		
東 大一郎	雇	M 9. 6	M 9. 8	帰京		
根本 源吾	雇	M 9. 6	M 9.12	退職		
河野 通信	雇	M 9. 6	M 10. 3	退職		
島津 良	雇	M 9. 6	M 10. 4	退職		
片平 新太郎	雇	M 9. 6	M 10. 6	転任		
金田 大三郎	雇	M 9. 6	M 11. 7	帰京		
藤崎 友十郎	雇	M 9. 6	M 13. 1	退職		
高田 歳之助	雇	M 9. 6	M 13. 4	帰京	岩山敬義碑発起人	
新原 敏三	雇	M 9. 6	M 13. 4	帰京	岩山敬義碑発起人，本文後述	
河合 八二郎	雇	M 9. 6	M 13. 9	帰京		
佐瀬 左衛門	雇	M 9. 6	M 15. 8	退職		
新村 直右衛門	雇	M 9. 6	M 18. 6	宮内		
赤羽 定教	八等属	M 9. 7	M 12. 5	退職		
芳野 敏三	雇	M 9. 7	M 9.11	退職		
久光 軍太	御用掛	M 9. 8	M 14. 3	退職	岩山敬義碑発起人，下総組	
平野 友章	七等属	M 9. 8	M 16. 7	退職		
藤 哲	雇	M 9. 8	M 11.11	退職		
水谷 権	雇	M 9. 8	M 12.10	退職	下総組。宮部 久，前田留吉をへて牛乳搾乳所・保生舎を譲り受け経営。	
内藤 新太郎	雇	M 9. 8	M 14. 4	退職		
薬丸 猪八郎	雇	M 9. 8	M 16. 9	帰京		
軽部 駒太郎	未記入	M 9. 8	不詳	不詳		
石澤 源八	雇	M 9.10	M 10. 2	退職		
岡田 健道	御用掛	M 9.12	M 15.10	退職		
樺山 莊輔	八等属	M 9.12	M 13. 4	帰京	その後勸農局八等属，農商務省農務局七等属等	
三村 源内	雇	M 9.12	M 10. 1	退職		
小野 直衛	雇	M 9.12	M 15.10	退職		
直井 恒	五等属	M 9.1?	M 18. 6	宮内	その後宮内省御料局五等属	
辻 正章	五等属	M 10. 1	M 18. 6	宮内	本文後述	
八木 正路	七等属	M 10. 1	M 10. 8	帰京		
萩原 貞固	八等属	M 10. 1	M 10. 4	転任		
池田 文策	八等属	M 10. 1	M 12. 9	退職		
北畠 具雄	雇	M 10. 1	M 10. 7	帰京		
魚沼 正安	雇	M 10. 3	M 10. 4	帰京		
垣田 彌	三等属	M 10. 4	M 12.12	帰京	その後勸農局三等属・農商務省農務局三等属・同一等属等	
河井 貞一	七等属	M 10. 4	M 13.10	帰京		
山口 辰次郎	六等属	M 10. 6	M 13. 4	帰京	その後勸農局六等属，農商務省農務局六等属	普
太田 常次郎	雇	M 10. 6	M 10.12	帰京		
長谷川 貞二	五等属	M 10.12	M 13. 8	退職		
丹野 信明	雇	M 10.12	M 14.11	転任		
折田 正介	五等属	M 11. 1	M 13.10	帰京	その後農商務省農務局五等属	
塙 修次	御用掛	M 11. 1	M 18. 6	宮内	その後宮内省御料局六等属，岩山敬義碑発起人	特
二階堂 部	御用掛	M 11. 2	M 15. 2	退職	兼宮内省御用掛（M13.10現在），岩山敬義碑発起人	特
安田 利次郎	七等属	M 11. 4	M 18. 6	宮内	その後宮内省御料局七等属	
舟木 真	五等属	M 11. 5	M 12.11	退職	M 9. 5. 8「牧羊開業掛兼務申付候事」，本文後述	普
清水 善五郎	雇	M 11. 7	M 14. 1	帰京		
伊丹 志津男	雇	M 11.12	M 14. 4	退職		
大井 誠之助	雇	M 11.12	M 14. 5	転任		
鈴木 誠一	雇	M 11.12	M 15. 1	帰京		
桂 彌市	六等属	M 11.12	M 18. 6	宮内	本文後述	特
田邊 安信	雇	M 11.12	M 18. 6	宮内		
松村 龜吉	雇	M 12. 8	M 18. 6	宮内		
土屋 泰直	七等属	M 12.12	M 14. 4	退職		
鈴木 美清	八等属	M 12.12	M 18. 6	宮内	その後宮内省御料局八等属（牧羊生徒出身の河合美清か？）	
龍田 退蔵	九等属	M 12.12	M 15. 1	退職	牧羊生徒出身	
渡邊 金三郎	雇	M 12.12	M 17.10	転任		
粕谷 晋安	雇	M 12.12	M 18. 6	宮内		
早川 茂一	八等属	M 13. 1	M 18. 6	宮内	その後宮内省御料局八等属	
井上 謙造	九等属	M 13. 1	M 16. 4	帰京	その後農商務省農務局九等属	
太田 又次郎	雇	M 13. 1	M 13. 3	帰京		
遠藤 三二司	九等属	M 13. 2	M 15. 8	帰京		
小野田新五郎	雇	M 13. 2	M 15. 8	職退	牧羊生徒出身	
藤崎勝右衛門	雇	M 8.10?	M 12.10	退職		

（出所）下総御料牧場（1894）『下総御料牧場沿革誌』下総御料牧場，126-133頁から作成。「備考」の記述は，主に各年度の『官員録』，『職員録』等に拠った。

（注）①「官等」は退任時または明治18年（1885）6月宮内省移管時のもの。

②「備考」欄の「下総組」については本文後述。

③「大」欄は大日本農会創設時に会員であったもので，「特」は特別会員，「普」は普通会員。

月23日にかけて、谷 干城農商務大臣以下6名による欧米巡回が行われ、このとき谷は「奥(青輔)氏を筆頭に語学の出来る者などを引きつれて行つた。その一行には独逸語の関 澄蔵、仏語には道家 齊、英語には農芸化学士牧野健蔵即ち奥健蔵氏が居つた。ところが奥 青輔氏は欧洲各国の漁業制度や漁業の発達程度等を視察して帰朝後大いに為すところあらんとしたに拘らず旅行中病に罹り、遂に独逸に於て長逝」(下, 1932: 9)したのである。明治20年(1887)7月31日、ベルリンの「オクタス病院」(大植編, 1971: 245)において死去、享年42歳であった。このように、奥 青輔は農政官僚として岩山敬義の系譜をひき、業半ばで逝ってしまったが、存命であれば、水産分野をはじめ農政各分野で今後の活躍が期待された逸材であった。谷 干城一行が残した報告書、『欧米巡回取調書』全7巻はこの欧米巡回の成果であり、それが明治20年以降の農政の展開に果たした意義を考えれば、この点はただちに首肯しうることであろう¹⁾。

(2) 第2グループ[牧畜事業指導者]

第2のグループは、岩山敬義の牧羊(ひろくは牧畜)事業指導者としての系譜を引き継ぐ人々である。第2代場長となった波多野尹政は、宮内省移管後間もない明治19年(1886)辞職し、その後は「民業に従ひ教育に尽し」、明治34年(1901)四谷銀行を創立してその頭取となった人物(大植編, 1971: 1044)なので、経歴的には第3のグループに入れた方がよいとも言えるが、3代場長宮岡正吉は波多野の退職後、短期間下総種畜場(正式名称は宮内省御料局高堀出張所)の場長をつとめたのち、明治20年(1887)2月御料局新冠出張所長となり、翌21年10月同所が主馬寮に移管され新冠御料牧場と改称されたのを機に退任して宮内省主馬寮に戻り(農林省畜産局畜産発達史編さん室, 1964: 21, 27)、その後明治30年代の半ば頃まで、下総御料牧場、新冠御料牧場、外山御料牧場を管轄する主馬寮に勤務している。また、明治10年(1877)1月に入場した辻 正章は、宮内省主馬寮技手、下総御料牧場技師と、一貫して現場の技術系官吏とし

ての道を歩み、『職員録』に名前が見られる最後の年である大正3年(1914)には、下総御料牧場技師(六等二級)で場長新山莊輔の次席の地位にあった。なお、辻には『日本牧羊問答』、『実用牧草新書』、『日本馬耕新書』などの著書もあり、「これらの書は当時数少ない牧草関係参考書として貴重なものであった」と評価されている(浜上, 1978: 22)。

(3) 第3グループ[民間事業家]

最後に第3のグループである。第1、第2のグループが官吏としての経歴を辿ったのに対して、第3のグループは官吏から民間に下った人々である。表2-1で退場事由が「退職」となっているほとんどが、このグループに入ると考えられる。彼らは岩山敬義を中核とした人的なネットワークの中で、「官」と「民」を結ぶ存在として、きわめて重要である。第3グループには判任官クラスもいるが、圧倒的に多いのは雇である。勸農局職員の中での雇に位置づけについては、『大日本農史』の明治11年(1878)11月の項に「十四日勸農局ニ於テ新宿試験場ニ限り日給雇ヲ改メテ農業生ト称ス」とあり、一字下げで「客歳以来本場ニ於テ農事篤志ノ者ヲ撰ミ金ヲ与ヘテ場務ニ使役シ傍ラ農牧ノ業ヲ購習セシムル者ナリ」(農務局纂訂, 1891: 283)と記されている。

表2-1を見ると、第3グループに属する雇の中で、「備考」欄に「下総組」と記された人物が二人いる。久光軍太と水谷 権である。これは『大日本牛乳史』に柳澤獣医学博士の言葉として引用された、「下総組とも云ふべきは、内務省所轄の三里塚種畜場時代の奉職者である波多野^{ママ}平政、久光軍太、古屋勇吉、水谷 権等の人々が、東京市内に搾乳業を開始した」(牛乳新聞社編纂, 1934: 217)という言葉によったものである。明治28年(1895)刊、一枚刷りの牛乳搾取販売業者番付には、行司の下欄に老練家として「真砂舎 久光軍太」の名が見られる。なお、「波多野平政」とは波多野尹政であろう。上記番付には行司の上欄に後見として、「四谷南伊賀町九番地 波多野友江 豊養軒」の名があるが、波多野尹政との関係は明らか

でない。ここではまず、東京市内で搾乳業を開始した「下総組」の中から新原敏三を取り上げてみよう。新原は芥川龍之介の実父で、芥川の伝記的研究の一環としていくつかの業績(森, 1974; 沖本, 1977)が著されている。以下、なるべく重複を避けて述べてみたい。

1) 新原敏三と耕牧舎

新原敏三は嘉永3年(1850)9月6日、周防国生見村(現山口県玖珂郡美和町生見)に生まれた。長州戦争では御楯隊に属し、芸州口・大野戦で負傷した。その後上京、明治9年(1876)6月下総牧羊場に雇として入場し、明治13年(1880)4月「帰京」という事由で退場している(下総御料牧場, 1894: 128)。

退場後は渋沢栄一らの起こした耕牧舎に関係した。耕牧舎設立の発端となったのは、明治11年(1878)3月に渋沢栄一が小松 彰、益田 孝と連名で勸農局長前島 密に提出した「緬羊拝借之義二付願書」である。これは「今日ノ急務ハ先ツ其原種羊ノ蕃殖ヲ勉メ且其畜糞法ヲ講究シテ苟モ之カ試業ヲ望ム者アレハ可成丈ケ低価ヲ以テ原種羊ヲ売却シ漸次其増殖ヲ謀ル」(農林省, 1955: 276)ことを目的として、上の3人が資本を持ち寄り牧場を設けようとしたが、「純良ノ緬羊ヲ海外ヨリ買取候ニハ其代価巨額ニ相成到底得失不相償ノミナラス随テ他日原種羊ヲ望ミ候ヘトモ低価ノ売却ハ出来兼」ねるという理由から、3年間据え置き、4年目より向こう7カ年間に、年3朱の低利で年賦返納という条件で綿羊500頭の拝借を願い出た文書であった。この願いは聞き届けられたが、「牧地之位置坪数水草之模様飼養繁殖ノ見込及返納方法等詳細取調更ニ上申可仕旨御指令」(農林省, 1955: 278)があったので、調査を行った結果、神奈川県下仙石原村の土地約743町歩の払い下げを受け、和洋牛を買い入れて開牧に着手した。この間の経緯について、『青淵先生六十年史』は「(渋沢)先生カ牧場ヲ函根ニ撰定シタルハ須永伝蔵ノ取調ニ依リタルモノナリ (中略) 明治十二年先生等牧畜業開始ノ拳アルヤ(同年から綿羊飼養法練習のため下総牧羊場に派遣していた) 須永相模仙石原ノ地最モ牧

畜業ニ適スルヲ以テ之ヲ先生ニ報ス (中略) 明治十三年須永先生ノ命ヲ受ケテ仙石原ニ到ルヤ野ニ臥シ山ニ寝ネ専ラ開拓ニ勉勵從事セシカ牧場ハ一面ニ大ナル菅繁茂シテ到底牧羊場トナスヲ得ス故ニ先ツ乳牛ヲ牧シテ草質ヲ改良シ而シテ後当初ノ目的ヲ達スヘシト同年三月洋牛牝犢三十頭ヲ米国ヨリ和牛三十頭ヲ南部地方ヨリ購入シ種牝牛ハ勸農局ヨリ良種貸下ヲ乞ヒテ之ヲ畜ヒ宮ノ下、函根等ニ支店ヲ設ケ牛乳ヲ販売」(龍門社編, 1900: 161-162)したと記している。なお、別の資料(大友編, 1948: 168)によれば、明治13年(1880)4月現在の耕牧舎の反別は737.3町歩、牛129頭、馬66頭となっている²⁾。

さらに明治13年(1880)10月、先に願い出た綿羊500頭のうち100頭の貸し下げを、今度は無利息にて願い出た。このときの文書中に「飼養其外施設ノ為メニハ本局備新原敏三御貸渡相成候」(農林省, 1955: 277-278)という一文があり、おそらくこのころから新原敏三は耕牧舎と本格的に係わったものと思われる³⁾。ところが、綿羊の貸し下げは、翌14年末になって見合わせとなってしまった。というのは、「牛馬ヲ箱根仙石原ニ牧シ羊ヲ野州地方ニ蒙ヒ両処各専一二從事可致積」りで、「野州地方之儀者塩谷郡伊佐野原之地所」を拝借し、この年から着手の見込みであったところ、「先頃以来最寄村々ニ於テ差支之旨申立」があって「急速之開設無覚束」なり、「仙石原之方者漸次牧牛馬ノ頭数モ相増シ此上他畜ヲ牧スヘキ余地モ無」くなったからである(農林省, 1955: 280)⁴⁾。この件について触れている同年5月1日付け、波多野尹政宛ての渋沢栄一書簡には、数か所にわたって新原敏三の名が見られ、彼が渋沢の下でさかんに活動していたことが窺える。

明治15年(1882)、耕牧舎は北豊島郡金杉村56番地(同25年、町名変更により下谷区中根岸13番地)に支店を設け、新原はその管理者となった。翌16年には、京橋区入舟町8丁目1番地[芥川龍之介の生誕地、現在の中央区明石町10先、聖路加国際病院第一街区南西隅](金山, 1993: 137)にも支店を増設、新原は両店の経営をまかされた。さらに

17 年になると金杉店は松村浅次郎に管理させ、入舟町店を東京本店と称し、新原はここを営業の拠点とした。ちなみに、明治 19 年 (1886) 5 月 7 日に認可された東京府下牛乳搾取販売営業組合の組合員名簿に、「京橋区築地入舟町八ノ一番地 新原敏三」、「北豊島郡金杉村五六番地 新原敏三」の名前がある (牛乳新聞社編纂, 1934 : 236-242)。翌 20 年 2 月、元有馬兵庫守と伊沢美作守の屋敷跡 7,446 坪余の払い下げを受け、その一部を耕牧舎の牧場とした。地番は東京府下豊多摩郡内藤新宿 2 丁目 71 番地で、農学者恒藤規隆の養子で、芥川龍之介の親友であった「恒藤 恭は牧場といっても小規模なもので千坪ぐらいの草原の中に牛舎があり、ホルスタインを何頭か飼っていたと回想している」(鷺編, 1992 : 38) という。明治 21 年 (1888) の『大日本東京牛乳搾取業一覧』(一枚刷り) には西の大関に「耕牧舎」が挙げられており (牛乳新聞社編纂, 1934 : 244)、23 年の『東京牛乳名家一覧』(一枚刷り) にも東の大関に「新原 耕牧舎」が挙げられている (窪田・全国酪農協会, 1965 : 433) ので、このころには新原は搾乳販売業者とした確たる地歩を獲得していた。

明治 26 年 (1893)、外国人居留地が手狭になり入舟町 8 丁目まで拡張されることとなったため、ここを引き払い、わが国乳業界の祖と言われる前田留吉の土地、芝区新銭座町 16 番地を購入し、本店を新築して移転した。転籍は 10 月 23 日付けであるが、移転したのは同年春から 8 月頃だとされている。以後、事業は急速に発展し、いくつかの支店、牧場をもつようになった。同 28 年の搾乳販売業者番付には「勸進元 北辰社 前田喜代松」と並んで「差添人 耕牧社 新原敏三」があり、また前頭上位に「北豊島郡瀧ノ川村字西ヶ原千三百九番地耕牧舎 山本良蔵」(西ヶ原支店)、中位に「下谷入谷町 松村浅次郎」(下谷区中根岸支店) の名前が挙げられている。このころから明治 30 年代半ばにかけてが新原の事業の全盛期だと言われている。やがて、明治 33 年 (1900)、「牛乳営業取締規則」が出された。東京市内の搾乳業者は、35 年 7 月までに市外に移転しなければならなくなった

ため、新銭座の店では乳牛飼養ができなくなり、また下谷の松村の店も北豊島郡日暮里谷中本 1062 番地に牧場と住居を移した。移転の費用には 1 万 2 千円余もかかったとされる。このころから、新原の耕牧舎は下り坂に入っていく。

明治 37 年 (1904) 8 月、箱根仙石原牧場を管理していた須永伝蔵が死去した。その後任は見つからず、事業継続が困難となったため、翌 38 年 6 月、牧場の財産処分が決定された。さらに同年 9 月、耕牧舎の東京各店のうち新銭座と新宿は新原に、日暮里は松村浅次郎に、また小田原店は岡部五郎 (須永の四男) に無利息 7 年賦で売り渡すことが決定した。これによって新原の耕牧舎は渋沢栄一ら箱根仙石原の耕牧舎から独立した。なお、弁済が終了したのは、大正 2 年 (1913) 2 月 26 日のことであった。

明治 42 年 (1909)、新原の女婿となった獣医の葛巻義定に新宿牧場の管理をまかせ、廃場となった仙石原牧場からは松村泰次郎を新宿牧場の牧夫長として迎えた。このころの耕牧舎については、『日本畜牛雑誌』が「当業者訪問録」として探訪記事を掲載しており、新宿牧場の全景写真なども載っている。これによれば耕牧舎は芝区新銭座町 16 に本店が、府下日暮里村役場前と府下王子西ヶ原御殿下の 2 カ所に支店が、府下内藤新宿町 2 の 71、府下日暮里、府下王子西ヶ原の 3 カ所に牧場があり、飼養頭数はそれぞれ約 60、30、20 頭であったという。また養牛場が鎌倉郡戸塚村と相州小田原町にあり、ここで飼養されていた犢牝牡はそれぞれ約 60、30 頭であった (凸人生, 1909 : 21-22)。ところが、同年 10 月、日暮里店の松村浅次郎が死去し、さらに翌 43 年には葛巻義定が娘と離婚したため新宿牧場の管理は松村泰次郎一人にかかることになり、事業は不振に陥った。種々試みた新しい事業も失敗に終わり、晩年は心身ともに衰え、さらに大正 3 年 (1914)、新宿牧場をまかせていた松村泰次郎の死は新原にとって大きな痛手となった。大正 8 年 (1919) 3 月 16 日朝、新原敏三は芝愛宕町の東京病院で死去した。享年 68 歳であった。

久光軍太・水谷 権など「下総組」と呼ばれた下総牧羊場関係の他の乳業者も、おそらく新原敏三と似たような経歴を辿ったのではないかと推定される。ところで、波多野を除けば「下総組」に属したのは、久光、水谷などほとんどが雇の身分であったが、判任官で下野した人々はどのような軌跡を辿ったのであろうか。

2) 桂 弥一と豊浦農場

まず六等属桂 弥一を取り上げてみよう⁵⁾。桂弥一は嘉永2年(1849)、長府(明治2年8月豊浦藩と改称)藩士桂助左衛門久澄の子として生まれ、名を季澄、はじめ常槌また勇次[桂(1928:61)には勇次郎とある]と称し、元服後弥市また弥一と改めた。管 文達につき四書漢籍素読等を学び、福田扇馬の桜柳亭塾に学んだ。元治元年(1864)、福田らの尽力で集童場が設立されるとその場生となった。乃木希典(無人)はこのときの同学で、桂の親友である。慶応2年(1866)、報国隊士・小隊長として小倉に出陣、明治元年(1868)には北越戦争に従軍した。同3年藩費により京都伏見の仏式練兵々営に派遣されたが、脚気のために途中で帰郷した。同4年、豊浦藩陸軍教官を拝命、同年冬、藩費による仏学修業のため上京し、築地でフランス人宣教師について学んだ。修学中に脚気を再発、明治6年(1873)帰郷した⁶⁾。同8年、再度上京、のちに下総牧羊場の同寮となる山口辰次郎に見いだされ、勸業寮内藤新宿試験場の臨時人夫となった。翌9年、下総牧羊場工事請負人 飯田縫左衛門に雇われ、やがて工事人夫監督に選ばれた。明治11年(1878)、飯田の推挙により下総牧羊場の五等牧夫(日給13銭)となり、同13年には三里塚区の責任者(牧監)となった。

明治17年(1884)、加藤 懋・桂 弥市編、後藤達三閲で『重修牧牛手引草』が農商務省農務局蔵版・製紙分社発兌として刊行された。農務局長岩山敬義の同年3月付けの「序」によれば、同書に先だって「勸業寮支庁ニ於テ生徒牧夫等二牧牛ノ要務ヲ知ラシメンカ為メ予(岩山)カ欧ニ在リテ見聞スル所ト自己ノ実験トヲ參酌シテ之ヲ説示シ當時垣田(弥)権中属ヲシテ筆記セシメタ」という

『牧牛手引草』が刊行されたが、その後「此業ニ従フ者陸續輩出シ随テ此書ノ増補ヲ希望スル者」が少なくなかったため、「其事項ト体裁トヲ指示シテ掛員桂弥市加藤懋等ニ編述ノ任ヲ負担セシメ頃日脱稿」したのが同書であり、当時としては数少ない牧牛の専門書であった。ちなみに、共編者の加藤は明治14年(1881)7月から同15年1月まで下総種畜場に雇として勤務し、英語が達者であったという。

ところで、明治17年(1884)7月、旧豊浦藩主毛利元敏は栃木県営那須牧場の払い下げを請うために、旧家臣の莊原好一と豊永長吉を派遣した。その際「桂弥市ヲ請フテ与ニ俱ニ牧場ニ抵ラ」しめ、三人は「該地ハ地質善良ニシテ他日農稼ノ好結果ヲ得ヘキ旨ヲ復命」した。同年11月、毛利は栃木県に対して「那須牧場払下願」を提出し、翌18年3月許可を受けた。那須牧場約900町歩、那須山支牧場約1,000町歩、牛141頭、農馬7頭などの払い下げをうけて、翌4月から那須農場として事業を開始、6月には豊浦農場と改称した。下総牧羊場は明治13年(1880)に取香種畜場と合併し下総種畜場となっていたが、この種畜場は明治18年(1885)6月宮内省に移管されることとなり、桂弥一はおそらくこの引き継ぎ作業を終了した同年12月、同場を退職、豊浦農場の農場長心得となった。農場の「当初の事業は、開墾・牧畜の直営であった。二～三年後に開墾の直営を廃止し、小作制に切り替えた。牧畜は十数年直営を続けたらしいが、のちに直営を廃止したようである。そうして耕地小作と山林直営を主とした一般的な農場経営となった」(黒磯市誌編さん委員会編、1975:469)。桂が豊浦農場を退職、帰郷したのは明治23年(1890)である。この間、明治21年には、ともに『重修牧牛手引草』を編纂した加藤 懋と『牧畜雑誌』の刊行を計画、翌22年7月に牧畜雑誌社から『牧畜雑誌』を創刊している。同誌は大正3年(1914)12月、第350号で廃刊となった。

帰郷後の桂は、農業に関連しては、植林事業や乳牛飼育・搾乳の事業を行い、明治25年(1892)には忌 宮神社所有の社地である満珠・千珠両島

を借り受けて豚・山羊・兎などの飼育・放牧を試み、また明治30年(1897)には牛乳販売のため牧場を開設し、牛8頭を飼育したほか、報徳社や報徳会関係の事業にも関与している。河村(1983: 150-151)によれば、桂は「高島北海画伯の長府土肥山の下と壇具川をはさんで川の左岸にまたがった土地に、田畑、牧場、本宅、別宅を持って」おり、「後の化粧品界の王者となったクラブ化粧品の太陽堂の中山(太一)社長が桂牧場の下僕として務めていた」という。晩年の昭和7年(1932)、長府功山寺境内に長門尊攘堂を建て、これはのちに長府博物館となった(古川, 2000: 77, 99)。昭和14年(1939)6月19日逝去、享年89歳であった⁷⁾。

3) 舟木 真と波東農社

最後にもう一人、五等属の舟木 真を挙げておこう。舟木の名は波東農社との関係で知られている。同社に関しては中村廣次氏の先駆的業績(中村, 1950a: 30-31, 1950b: 20-21)がある。その後、木戸田四郎氏によって本格的な研究が開始され、多数の研究・史料集⁸⁾が刊行された。ここでは、先行研究では触れられていない点を含め簡潔に見ておこう。舟木は下館藩士岡村園人の次男として弘化4年(1847)2月25日に生まれ、安政6年(1859)同藩藩士舟木要助の養子となった。明治2年(1869)、福沢諭吉の門下生として英学を学び、明治5年(1872)5月開拓使十五等出仕・学校教授課英学方を、さらに同年7月十三等出仕・英学助教、8月札幌詰・仮学校懸を申し付けられた。翌年9月、依願免出仕となった。明治7年(1874)1月、内務省勸業寮が設置されると同寮雇となり、(内藤新宿)出張所勤務を申し付けられ、同年3月には同寮十二等出仕に補せられた。

翌明治8年(1875)4月28日付けで『岩山敬義報告理事功程』が提出された。これは岩山敬義がかつて岩倉使節団の理事官として米欧で調査を行った際の報告書である。ここに収録されている5つの文書のうち、「英国サイレンシストル農学校大意」、「英国獣医学校生徒規則及法度」および「英倫農業会社」の3つを舟木 真が翻訳している(友田, 1997: 37-44)。なお、残りの2つの文書の

うち、「華盛頓府勸業寮職制」については訳者が記されていないが、「同事務章程」は鳴門義民の翻訳なので、前者もおそらく鳴門の翻訳になるものであろう。鳴門は、勸業局の上司池田謙蔵とともに、のちに舟木の波東農社に合併社員として関係する人物で、慶應義塾や尺 振八の共立学舎と並ぶ英学塾鳴門塾を経営したことで知られる。その経歴等については佐光(1990: 115-131)等を参照されたい。

同8年5月、舟木は「少属飯田孝次ト共ニ豪洲ニ赴キ農業ノ実況ヲ探訪スルノ欽命ヲ蒙リ(中略、同年)六月一日博覧会事務官ト共ニ発航シ八月二日^(ウ)ビリトリヤ州メルボルン府ニ着シ同洲ニ滞留且近傍ヲ巡回セシ日数七ヶ月余三月廿二日同洲ヲ出發シ四月廿四日帰朝」(農林省, 1955: 584)した。この間、8年7月には勸業権中属に任ぜられた。オーストラリアにおける農業調査⁹⁾の復命書は、翌明治9年7月付けで「豪州行復命書」(農林省, 1955: 583-609)として勸業頭松方正義宛てに提出された。「オースタラリア洲ニ於テ牧畜ノ開進セシ原因」、「オースタラリア洲ニ於テ牧育スル家畜ノ種類」、「メルボルン牛羊市場ノ概景」、「オーストラリア州家畜ノ取締規則ノ大畧」、「農事勸奨ノ為メ農務寮ヨリ諸会社ニ補助金賞金ノ配與方法概略」および多くの付表からなる詳細なものである。

帰国後間もない、明治9年(1876)5月8日には牧羊開業掛兼務を申し付けられ、下総牧羊場に出張、7月には奥 青輔らとともに清国派遣を命ぜられた。翌10年1月、内務五等属となり勸業局事務取扱を命ぜられ、間もなく再び清国に派遣された。同年12月に帰国、翌11年1月牧羊場出張を、さらに5月牧羊場在勤を申し付けられた。明治12年(1879)11月13日依願免本官となった。このように舟木が本務として下総牧羊場に在勤した期間は1年半と短かったが、その以前から牧羊事業のためオーストラリアや清国へ頻繁に出張しており、その業績は小さくない。

明治13年(1880)1月刊行の『東洋農会四季報告』第1号「社告」は、「舟木真氏茨城県下ニ於テ

荒蕪開拓ノ起業ヲ計較シ客歲十一月辭職帰県目今水戸上市南町十九番地二住ス」と報じている。舟木は明治12年(1879)11月21日、「泰西農式ニ由テ至急開拓ヲ計リ牧畜穀作等混同農業ヲ開キ漸次旧郷土族ヲ誘導シテ産業ニ就」(鉾田町史編さん委員会編, 1992: 1) かせることを目的に、鹿島郡宮ヶ崎外8か村地先の官有地約700町歩について、「荒蕪地拝借并御払下願」を野村維章県令に提出、翌13年3月11日に許可され、事業推進のために波東農社を組織したのである。なお、同年3月8日に県令は野村から人見 寧に代わったが、人見は前年5月に茨城県大書記官に任ぜられており、さらにその以前は内務省勸業寮七等出仕(第7課製茶掛長)、勸農局御用掛(動植課長心得)として舟木の上司であった(森田, 1991: 35-36)。人見はその後、5年4か月の長きにわたって県令を勤め、その間、舟木にとっては事業の有力な後援者の役割を果たした¹⁰⁾。

明治13年(1880)、「茨城県ヨリ管内土族舟木真ガ常陸ノ国鹿島郡宮ヶ崎村等ノ原野ヲ開墾スルガ為メ西洋農具、農馬及ヒ馬耕法ニ熟達セル農夫ヲ貸与セラレンコトヲ内務省ニ稟請ス是ノ日(同年4月21日)之ヲ聴許」(農務局纂訂, 1891: 340)され、開墾事業はいよいよ本格的に開始させることになる。これについては、すでに述べたように多数の研究蓄積があるので、ここではその経緯を足早に辿っておくにとどめよう。

波東農社の経営は木戸田氏によって4期に分けて考察されている。それによれば第1期は開墾開始以来、牧羊経営をめざし、明治17年(1884)舟木村の開村による開墾事業の一段落達成までの創業期、第2期は牧羊経営から牛馬飼育への転換をはかるが、資金難等のために事業規模を縮小せざるをえなかった明治22年(1889)までの事業転換期、第3期は農社の直営事業規模を急速に縮小し、貸付地経営に重点を移行させたが、経営が悪化し借金と土地売却が増大した明治27年(1894)までの事業縮小期、第4期は経営の混乱から農社の解散にいたる明治28年以降、翌29年までの事業解体期である。このように全期間を通じて、農

社の経営は当初の目的からしだいに遠ざかり、直営大農場経営の夢は実現することなく終わった。しかし、のち大正5年(1916)5月、「舟木君彰功報徳碑」が立てられたことからわかるように、この地の開墾に果たした舟木の役割は極めて大きかった。舟木は農社解散後、大蔵省の葉煙草専売所長、北海道の税務署長等を歴任した。大正5年2月5日病のため逝去、享年数え年で70歳であった。

このほかにも下総牧羊場や岩山敬義に縁のあった人は多く、例えば鹿児島島の著名な牧畜家知識兼雄¹¹⁾などもその一人であるが、ここでは後日の課題としておきたい。

V. おわりに

明治26年1月の『大日本農会報』に、「岩山勸農資金に就きて」という一文が掲載された。これは前年「二月池田謙蔵君等発起人となり(岩山)君の記念のため勸農資金を醸集することとなり此事務取扱」を委嘱された稲波惇太郎が、発起人たちによって寄付者の名簿等が岩山家に送られ、一周忌の霊前に供えられたことを報告した文である(稲波, 1893: 26-27)。この勸農資金は、「岩山敬義君が生前殖産事業に熱心なりし遺志を表彰」するため奥 健蔵(奥 青輔の養子)、波多野尹政、池田謙蔵、岡 毅、片山遠平、関沢明清といった岩山敬義ゆかりの人々を発起人に、大日本農会幹事長田中芳男を特別賛成人として募金したもので、その結果506円54銭が集まり、全額を「大日本農会に贈付し同会に於て開設する共進会品評会等の出品優等者および農事功労者に岩山賞典の名称を以て其利子を賞与すること」とされた(著者不詳, 1893: 40-41)。募金に応じたのは、個人・団体合わせて370人弱に及ぶが、拠金額筆頭(20円)の赤羽定教は下総牧羊場創設時からの職員(八等属)で明治12年に退職した人物であり、また10円というこれも高額拠金の7人(2人は連名)と1団体のうち、桂 弥一、垣田 弥、辻 正章、山口辰次郎、藤崎友十郎と忠貞(連名)の5人は、いずれも下総牧羊場の職員であった。このほかにも職員で

は宮岡正吉、川合執銀、塙 脩治、新原敏三など、牧羊生徒では小野戒三、矢内俊夫、佐竹義晴などの名前が見られ、下総牧羊場の人脈の強さが窺える名簿となっている。

以上、考察してきたように岩山敬義を中核とした下総牧羊場関係者の人脈は、中央においては内務省・農商務省の農政官僚や宮内省の畜産関係官僚・技術者として、また府県においては勧業関係官吏・技術者として、さらに民間にあつては都市における搾乳販売業や開墾地における大農経営・牧畜経営など事業家として、きわめて幅広い展開を示している。それは大久保利通を頂点に形成された農政実務官僚を中心とするネットワークの不可欠な一部分を構成しており、内務省期、さらに

は農商務省期に入っても中央や府県の勸農政策はこれらネットワークを推進主体として展開されていた。

最後に、本稿では直接には触れなかったが、ここで取り上げた牧羊生徒や職員など牧羊場関係者を中心に、その他かなり広範囲にわたる人々をも含めて、東洋農会が結成されたことは農政史上において重要である。この東洋農会は、明治 14 年 (1881) の大日本農会結成に際して、最も主要な母体の一つとなった。東洋農会についてこれまでの研究で得られた知見についてはかなりの修正を要すると考えるが、この点の考察、ならびに東洋農会を媒介としての大日本農会の結成に関する検討は次稿の課題としたい。

注

- 『欧米巡回取調書 総覧』の冒頭には、明治 20 年 (1887) 12 月付け、農商務属牧野健蔵 (のち奥 青輔の女婿となり奥 健蔵)、同関 澄蔵、同道家 齊、および農商務省参事官樋田魯一の連名で農商務大臣黒田清隆に宛てた「欧米巡回取調ノ義ニ付開申」が掲げられており、欧米巡回から「帰朝後間モナク (谷干城) 大臣其職ヲ辞サレ随テ柴 (四朗) 秘書官モ辞職シ加^{しかのみならず}之奥 (青輔) 水産局長八病^{せんびょう}シテ伯林ニ残セリ斯ル不幸ニシテ其全 豹ヲ具ヘ能ハサルハ頗ル遺憾ナリトス只随行員ノ當テ命ヲ稟ケ取調ヲナシタル事項ト之レカ参照ニ要用ノ書類ト別紙目録ノ通取纏目巡回中感覚ノ要ヲ摘録」(農商務省, 1888: 1-2) したと述べている。『欧米巡回取調書』に関する研究としては、地理学の分野で大嶽幸彦氏の業績 (1997: 319-330, 1999: 645-654, 2000: 397-405) がある程度で、農政史の視点から本格的に取り組んだ研究を筆者は寡聞にして知らない。
- 箱根仙石原の耕牧舎については、大和田・鈴木の論考 (1994: 10-60) がほとんど唯一の研究である。なお、耕牧舎のあった一帯は、現在はゴルフ場などとなっており、その脇を通る仙石原・湖尻自然探勝歩道の途中に、須永伝蔵の石碑と碑についての説明板、および「耕牧舎跡」と題された案内板がある。案内板には、「明治十三年、渋沢栄一、益田 孝らは『耕牧舎』という会社を作り、仙石原村・元箱根村の原野約七百ヘクタールを利用して牧場を開きました。最盛期には牛二百頭、馬八十頭を放牧し、当時
- 珍しかった牛乳やバター、牛肉などを販売して、避暑に箱根を訪れた外国人らに喜ばれました。」と記されている。
- 明治 13 年 (1880) 1 月 23 日と 28 日付けの、渋沢栄一から須永伝蔵宛の書簡には、「岩山氏へも御礼状封さし上候」、「岩山氏へは其中何か品物二てもさし上過日之挨拶いたし度」といった言葉が見られるので、須永を通じて岩山敬義へ綿羊の貸与や新原敏三の貸し渡しの世話を頼んだことがわかる (渋沢青淵記念財団龍門社編, 1957: 491-492)。
- 伊佐野原は近世には近郷の村々の入会地で、明治に入り官有地に編入されたが、渋沢等の拝借願いは地元住民の反対にあつて断念せざるをえなくなった。のち、明治 16 年 (1883)、山縣有朋によって拝借願いが出され、このときも地元の反対があつたが、那須開墾社の矢板 武の仲介により解決され、翌 17 年に許可がおりて山縣開墾社 (のち山縣農場) となった (石川, 2000: 259)。山縣農場については栃木県史編さん委員会編 (1975) などがあるが、山縣睦子 (1998) も興味深いものがある。
- 桂 弥一については、三浦編 (1940: 1-7)、内田 (1963: 310-316)、野村 (1994: 2-11)、下関市立長府博物館 (2000: 3-4) に拠ったほか、後述の毛利農場 (豊浦農場) 関係の記述は、主に黒磯市誌編さん委員会 (1975: 467-475) に拠った。
- このときの入院時に受けたドイツ人ホフマンの食事療法から、桂はパンの研究を思い立ち、退院後銀

座の木村屋を訪ね、その後親しく交流した。これが桂が牧畜の道に入る契機となったとする文献（戸川，2000：65-70）があるが、典拠資料は明らかでない。

- 7) 桂 弥一には「その長逝に先つこと僅かに十数日、(中略、中山太一の)太陽閣に宿泊せられた際偉才永富独嘯庵の事歴に関し」語った談話筆記「永富独嘯庵」があり(永富撰、富士川訳解、1940：179-183)、これは粟島(1997：469-475)にも再録されている。
- 8) 例えば、木戸田(1961：35-92；1962：1-58；1992：1-30)、茨城県農業史研究会編(1969：110-144；1976：9-12、55-74)、鉾田町史編さん委員会編(1992：xxx、1-339)、井上(1997：81-89)などである。なお、筆者もマックス・フェスカとの関連で舟木 真と波東農社についてごく簡単ではあるが触れ

たことがある(友田、1982：35-36)。

- 9) この調査の「命令状」では、「英国政府ニ於テ此地ヲ所轄トナセシヨリ野蛮渺ノ地ヲ変シ沃野饒地トナシ以テ今日ノ盛大ニ至ラシメシ原因方法及ヒ即今農学校勸農会社殖民会社等ノ方法総テ農事必要ノ事實審明取調可申事」(鉾田町史編さん委員会編、1992：336-337)とあり、農学校や勸農会社(農会)にとくに大きな関心が寄せられていた。
- 10) 人見 寧の生涯のうち、茨城県令としての勸農関係の業績では、養蚕の振興、勸農局時代の同僚高畠千畝の勸業課長への起用、徳川家大能牧場の再興などが注目される。
- 11) 知識兼雄(1835-1900)と農事社については、とりあえず鹿児島県(1943)、農林省畜産局(1966)、加茂(1976)、安藤(1988)、雪印乳業広報室編(1988)などを参照されたい。なお、兼雄の跡継ぎ知識四郎は、明治19年(1886)東京農林学校農学科の卒業生で、訳著に『酪農提要』(知識、1886)がある。

引用・参考文献

- 粟島行春著・訳注(1997)『医聖永富独嘯庵』東洋医学薬学古典研究会。
- 安藤精一(1988)『土族授産史の研究』清文堂。
- 石川明範(2000)『『伊佐野農場図稿』を読む』『伊佐野農場図稿』草思社。
- 稲波惇太郎(1893)「岩山勸農資金に就きて」『大日本農会報』大日本農会、第136号。
- 井上 毅(1997)『農法変革の歴史理論』日本経済評論社。
- 茨城県農業史研究会編(1969)『茨城県農業史』茨城県農業史編さん会、第5巻。
- 茨城県農業史研究会編(1976)『茨城県農業史料』茨城県農業史編さん会。
- 内田要助(1963)『桂翁の横顔』長府博物館。
- 大植四郎編(1971)『明治過去帳』東京美術。
- 大嶽幸彦(1997)「地理学から見た『農商務省版 欧米巡回取調書』—フランス国を中心に—」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学、第17巻第1号。
- 大嶽幸彦(1999)「地理学から見た『農商務省版 欧米巡回取調書』—ドイツ国を中心に—」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学、第18巻第2号。
- 大嶽幸彦(2000)「地理学から見た『農商務省版 欧米巡回取調書』—ベルギー国を中心に—」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学、第19巻第2号。
- 大友源九郎編(1948)『馬事年史』日本競馬会、三。
- 大和田公一・鈴木康弘(1994)「山間村落の黎明—近世・近代の仙石原村—」『箱根町立郷土資料館 館報』箱根町立郷土資料館、第10号。
- 沖本常吉(1977)『芥川龍之介以前』東洋図書出版。
- 鹿児島県(1943)『鹿児島県史』鹿児島県、第4巻。
- 桂弥一講(1928)『集童場に関する桂弥一翁懐旧談の大意』長府図書館。
- 加藤 懋・桂 弥市編、後藤達三訳(1884)『重修牧牛手引草』農商務省農務局蔵版、製紙分社発売。
- 金山正好・金山るみ(1993)『中央区史跡散歩』学生社。
- 加茂儀一(1976)『日本畜産史 食肉・乳酪篇』法政大学出版局。
- 河村幸次郎(1983)「桂彌一翁のこと」長府博物館五十年史編集委員会編『城下町長府の文化』長府博物館友の会。
- 木戸田四郎(1961)「明治前期における土族開墾の一例」『茨城大学文理学部紀要 社会科学』茨城大学文理学部、第12号。
- 木戸田四郎(1962)「明治前期における土族開墾の一例」『農業史資料』茨城県農業史編さん会、第10号。
- 木戸田四郎(1992)「波東農社の設立とその推移」『鉾田町史研究 七瀬』鉾田町、第2号。
- 牛乳新聞社編纂(1934)『大日本牛乳史』牛乳新聞社蔵版。

- 窪田五郎 (1940)『日本牛史』子安農園出版部。
- 窪田喜照著・全国酪農協会編 (1965)『日本酪農史』中央公論事業出版。
- 黒磯市誌編さん委員会編 (1975)『黒磯市誌』黒磯市。
- 鷲 只雄編 (1992)『年表作家読本芥川龍之介』河出書房新社。
- 佐光昭二 (1990)「鳴門義民・その人と業績」『英学史研究』日本英学史学会, 第 23 号。
- 渋沢青淵記念財団龍門社編 (1957)『渋沢栄一伝記資料』同刊行会, 第 15 卷。
- 渋沢青淵記念財団龍門社編 (1964)『渋沢栄一伝記資料』同刊行会, 第 54 卷。
- 下総御料牧場 (1894)『下総御料牧場沿革誌』下総御料牧場。
- 下 啓助 (1932)『明治大正水産回顧録』東京水産新聞社。
- 下関市立長府博物館編 (2000)『桂弥一と長門尊攘堂』下関市立長府博物館。
- 知識四郎訳 (1886)『酪農提要』東京北辰社蔵版。
- 辻 正章 (1905)『日本牧羊問答』有隣堂。
- 辻 正章 (1906)『実用牧草新書』有隣堂。
- 辻 正章 (1907)『日本馬耕新書』裳華房。
- 凸人生 (1909)「耕牧舎新宿牧場 [当業者訪問録 (五)]」『日本畜牛雑誌』大日本畜牛改良同盟会編輯部, 第 53 号。
- 東洋農会 (1880)「社告」『東洋農会四季報告』東洋農会, 第 1 号。
- 戸川幸夫 (2000)『人間 乃木希典』学陽書房。
- 栃木県史編さん委員会編 (1975)『栃木県史』栃木県, 史料編・近現代 5。
- 友田清彦 (1982)「M. フェスカの日本原野開墾論 (1)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第 55 号。
- 友田清彦 (1997)「岩倉使節理事官『理事功程』と日本農業 (2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第 84 号。
- 永富独嘯庵先生撰, 富士川瀨訳解 (1940)『訳解 漫游雜記』中山文化研究所。
- 中村廣次 (1950 a)「開拓史物語 (1)」『茨城農村』「茨城農村」刊行会, 昭和 25 年 11 月号。
- 中村廣次 (1950 b)「開拓史物語 (2)」『茨城農村』「茨城農村」刊行会, 昭和 25 年 12 月号。
- 農商務省 (1888)『欧米巡回取調書 総覧』農商務省蔵版。
- 農務局纂訂 (1891)『大日本農史今世』農商務省蔵版, 東京博文館発売。
- 農林省 (1955)『農務顛末』農林省, 第 4 卷。
- 農林省畜産局畜産発達史編さん室 (1964)『新冠御料牧場沿革誌』畜産発達史編さん資料, 農林省畜産局, No. 12。
- 農林省畜産局編 (1966)『畜産発達史 本篇』。
- 「農林水産省百年史」編纂委員会 (1982)『農林水産省百年史』農林統計協会, 別巻。
- 野村忠司 (1994)「明治の気骨桂弥一」『しものせき・人・物語 (5)』絹の道の会。
- 波多野尹政ほか (1893)「岩山勸農資金報告」『大日本農会報』大日本農会, 第 136 号。
- 浜上長正 (1978)「下総御料牧場の牧草栽培と農機具導入の事績 (1)」『畜産の研究』養賢堂, 第 32 巻第 11 号。
- 古川 薫 (2000)『新編歴史散歩 城下町長府』新日本教育図書。
- 鉾田町史編さん委員会編 (1992)『鉾田町史 明治期開拓史料編』鉾田町。
- 三浦耕作編 (1940)『偉人桂弥一翁を語る』中山太陽堂太陽閣。
- 森 啓祐 (1974)「芥川龍之介の父」『芥川龍之介の父』桜楓社。
- 森田美比 (1991)『茨城県政と歴代知事』暁印書館。
- 山縣睦子 (1998)『木を育て森に生きる』草思社。
- 雪印乳業広報室編 (1988)『牛乳と日本人』新宿書房。
- 龍門社編 (1900)『青淵先生六十年史』龍門社蔵版, 第 2 卷。
- 著者不詳 (1893)「岩山勸農資金」『大日本農会報』大日本農会, 第 136 号。

(受付 2002 年 11 月 12 日)
(受理 2002 年 12 月 10 日)

The Staffs and the Graduates at the Simofusa Bokuyoujyou (2)

Kiyohiko TOMODA (Tokyo University of Agriculture)

Keigi Iwayama was a central agricultural administration bureaucrat in the first half of the Meiji era. His most important achievements, especially in the second decade of the Meiji era, were the establishment and management for the Shimofusa Bokuyoujyou. The Shimofusa Bokuyoujyou was a fattening and breeding pasture of sheep in Chiba Prefecture. It was a model pasture and was an agricultural educational institution at the same time. This paper clarifies the achievements of the staffs at the Simofusa Bokuyoujyou and the role the staffs played in the modern history of Japanese agriculture.